身延山十二世円教院日意上人伝に関する二、三の問題について

桑名貫正

一、はじめに

円教院日意上人は、師行学院日朝上人・法弟宝聚院日伝上人と共に身延の教学の充実と伽藍整備に大なる功績を残されている。そこで身延山史上で「朝・意・伝三師」と称され、身延中興の三師と呼び、高く評価された人である。[1] 日意上人は、もと天台宗の学匠にして泰藝といい、勢州妙蓮寺の貫首であった。[2] 後に日蓮宗に改衣して身延十一世行学院日朝上人の弟子となり、日意と名乗るのである。[3] 間も無く師日朝上人の命を稟けて上洛し、文明七年（一四七五）三十二歳の時、京都妙傳寺を開創し二十数年間住する。[4] そして明応八年（一四九九）五十六歳の時には、身延山十二世に晋董され二十一年間活躍する。

永正十六年（一五一九）七十六歳にて遷化するが、その生涯を大きく分けて見ると、㈠天台宗学匠の泰藝時代、㈡京都本山妙傳寺時代、㈢身延山久遠寺時代の区分にて捉えることが可能である。日意上人の業績を挙げるとすれば、何よりも第一の功績は「身延文庫」の発展に大なる業績を残されたことである。それは師日朝上人の御遺文蒐集に情熱と精魂を傾けたその意志を引き継がれ努力し、『蔵書目録』（高祖御筆御書註文・台教聖教注文日意所持本）[5] を作成

されている。この目録の存在価値は、「身延文庫」にとって、今日に至っても大きな成果となっているのである。「高祖御筆御書註文」は立正大学日蓮教学研究所編『昭和定本日蓮聖人遺文』第三巻に『大聖人御筆目録』として所収されている。

日意上人の第二の功績は明応七年（一四九八）八月二十五日辰刻の大地震により、身延山の諸堂塔が悉く崩壊し[6]、それの復興に努めたことである。第三は後董に法弟日伝上人を決め、また身延山十四世善学院日鏡上人を養育したことである。身延山学園の伝統は、この日鏡上人が人材育成の為に西谷に「善学院」を開校されたことを源とする。

日意上人の身延山史上におけるその位置は、実に大きいのである。しかし、従前の日意上人伝の研究には纏まったものは見られないのが現状なのである[7]。本研究は、天台宗時代の泰藝について焦点をあて、その誕生・出家の年令考。修学の足跡を解明し、今日伝承するところの日意上人と師日朝上人との比叡山同学説に対して、再考の余地あることを提起したい。併せて、日意上人の改衣の時期の問題をも考察するものである。

二、泰藝（日意上人）の誕生について

現存する日意上人の著述本・写書本・所持本の多くは日蓮宗総本山身延山久遠寺の「身延文庫」に所蔵されており、その巻数は二百数十巻に及んでいる。その他、京都の本山妙傳寺所蔵等の典籍も確認されている。今日、その日意上人典籍関係の文献資料等の概要を「円教院日意上人著述目録」において見ることが可能である[8]。この日意上人御筆の典籍の中には、日意上人の誕生・出家の年齢等に関する書写奥書等の識語が見られるから、それ等を手掛かりに考察を推し進めると次の様なことが認識できるのである。

現存する日意上人御筆の典籍中で、一番最初に書かれたものは天台教学書の(1)『大綱深義書』の写書本であろう。この書写奥書（四十六丁裏）の識語には、次の様な内容が記載されている。

寛正五年（一四六四）　極月朔日辰下尅書写畢　泰藝

以下、典籍中において考察するところの識語の記載が見られる書を、何点か年代順に挙げると次の如くである。

天台論義書の(2)『問要』の書写奥書（三十一巻・三十二巻の合巻・二十丁裏）には、

寛正六年（一四六五）八月八日申尅書写早

右筆泰藝生年四五一戈

同じく天台論義書の書写本である(3)『宗要集私抄』九巻「教相下」書写奥書には

此抄者依年来所望仏神祈念感得之畢　努々不可處聊爾相構々々可移之

依此懇志写功徳法界利益及九界有情平等自他周遍也

干時寛正七年二月十六日書之訖

山門楞厳院都率谷桂林房写之泰藝生年廿二

(4)『宗要集私抄』二巻「菩薩部上」書写奥書には、

寛正七年二月廿七日戌下尅書写早

持主泰藝戊廿二

(5)『宗要集私抄』七巻「五時部下」には、

文正元年（一四六六）三月廿九日初夜過書写早

山門楞厳院都率谷桂林房北向部屋書之早

右筆泰藝生年四五二
奥九

(6)『宗要集私抄』十巻「雑部上」には、

文正元年卯月廿三日写早

泰藝生廿二
奥九

(7)『宗要集私抄』十一巻「雑部下」には、

文正元年五月廿五日酉剋書写早

楞厳院都率谷桂林房北向部屋書之

泰藝四生戌
五二

(8)『宗要集私抄』四巻「二乗部上」には、

文正元年六月六日牛上剋書写早

右筆泰藝四生戌
五二

(9)宗要集私抄』五巻「二乗部下」には、

文正元年六月十八日未剋書早

右筆泰藝生戌四五二
奥九

(10)『一流相傳法門見聞』上下二巻の書写奥書には、

應仁元年（一四六七）丁亥八月廿七日授泰藝訖

法印春海示

(11)『初発真住抄』の書写奥書には、

文明貳年（一四七〇）庚戌六月七日

武州金鑽宮談所一乗院

写書此了

奉授与泰藝了

榮舜花押

以上、挙げた書写本は孰れもが「身延文庫」所蔵のものである。(10)(11)の書写本には、直接に日意上人の誕生・出家年令考に関する手掛かりは見られないが、(2)の『問要』書写奥書に寛正六年（一四六五）生年四五一歳と見える。また(3)(4)(6)の『宗要集私抄』の書写奥書には、生年二十二・歳二十二・齢九と見えることから、日意上人の誕生は逆算すると文安二年（一四四五）の生まれであるということを知ることができるのである。

ところが、その後に書かれた日意上人御筆の典籍には始終一貫して嘉吉四年（一四四四・改元二月五日文安元年）の生まれであるという識語が見えるのである。その典籍を挙げると次の通りである。

(12)『十如是義』上巻の書写奥書に、

文明二年（一四七〇）七月十一日申上剋書写

於小濱普門寺堂写之右筆泰藝生年廿七才

(13)『一流相傳法門私見聞』上巻の書写奥書には、

文明二年十月日　　泰藝生年廿七 寅十一

(14)同下巻の書写奥書に、

文明二年庚戌十月晦日結願早　　泰藝生年廿七 寅十一

(15)『宗要集要文』「二乗部」上の書写奥書に、

宗要集要文　定性二乗等

一校早　　泰藝生年廿八才 戌十二 寅

文明三辛卯年正月八日書写早

(16)『宗要集要文』「二乗部」下の書写奥書には、

文明三年正月十九日子剋書写早　　泰藝生年廿八才 寅十二

(17)『宗要集要文』「菩薩部」の書写奥書に、

文明三年二月九日申剋書写早　　泰藝生年廿八 寅十二

(18)『宗要集要文』「五時部」下の書写奥書に、

文明三年三月十一日羊上剋書写早

泰藝生年廿八 卯十二

(19)『摩訶止観大綱見聞』第四巻の書写奥書には、

文明三年七月十七日夜子上剋書写了

右筆泰藝生年廿八 卯十二

(20)『第二重私聞書』の書写奥書に、

文明三年辛卯年八月二日夜子上剋書了

此本抄外事一言宛注之大旨本書同(バ)(ノ)(ノ)(ニシ)(ニ)故畧スル也

右筆泰藝生年廿八 卯十二

(21)『雑々抄』(心榮口伝) 第一の書写奥書には、

文明三年辛卯八月三日戌剋於武州金鑽寺

佛乗房書了右筆泰藝生年廿八 卯十二

(22)『一流相傳法門私見聞』上巻の書写奥書には、

文明四天壬辰二月十一日申剋了

一流相傳法門私見聞　第二度〆泰藝生年廿九 卯十三

(23)同下巻の書写奥書には、

文明四天壬辰二月十九日書写了

第二度目

相傳法門私見聞　　右筆泰藝生年廿九歳十三

㉔『問答用意抄』第三巻の書写奥書に、

文明第七乙未　九月十九日書写了

日意生年卅二才

㉕『即身義私案龍女分極』の書写奥書に、

是ハ勢州菜名之寺為稽古両三人談合奥行イヘトモ聖教無之

間私類聚之也雖而不致御談過了無念次第也

思案シテ　　日意花押生年四十

㉖『止観法華大意』の書写奥書には、

於京都一条弘通所妙傳寺生年五十四書了

明應六年己丁五月廿七日巳尅斗書之了日意花押

以上、挙げた⑿から㉕までは「身延文庫」所蔵の典籍であり、㉖の典籍は京都本山妙傳寺所蔵のものである。これらの典籍の識語に基づいて逆算するならば日意上人の誕生は一四四四年生まれとなる。日意上人御筆の典籍の識語に一四四五年の誕生説と一四四四年誕生説の二通りの基準が見られるのは、どうしてなのか判断に苦しむところである。然し、一四四五年誕生説の基準となる典籍(1)～(9)の識語は、文正元年（一四六六）までしか見られない。文明二年（一四七〇）⑿『十如是義』以降の典籍識語は一四四四年誕生説を述べており、㉔『問答用意抄』三巻の生年三十二歳、㉕『即身義私案立龍女分極』の生年四十歳、㉖『止観法華大意』の生年五十四歳と見られるが如く、後説は晩年に至るまで変わらない基準を示しているのである。従って、日意上人の誕生は一四四四年生まれと判断しても妥当で

あると考えるのである。

三、泰藝（日意上人）の出家・授戒の年令考

日意上人の出家の年令考を考察するに、寛正七年・文正元年（一四六六）の『宗要集私抄』典籍の(3)・(4)・(5)・(6)・(9)を往見されたい。その識語には生年二十二歳・藕九と記述されているから、逆算するならば日意上人の出家年令は十四歳と判断することができるのである。

ところが、文明二年（一四七〇）の(12)『十如是義』上巻、(13)・(14)『一流相傳法門私見聞』には、生年二十七歳・藕十一年と記述され、『宗要集要文』(15)・(16)・(17)・(18)と文明三年の書写本の(19)・(20)・(21)の典籍には生年二十八歳・藕十二年と見られ、文明四年の書写本(22)・(23)の『一流相傳法門私見聞』には生年二十九歳・藕十三年と示めされているから、これに基づいて逆算すると出家の年令は十七歳となるのである。日意上人御筆の典籍の識語において、年令・藕の数え方は必ずしも一定していないのである。

この日意上人の年令及び藕の数え方の相違の問題を、判断し易くするために表を作成すると別表1の如くになる。

別表 1

西暦	元号	(3)〜(9)の説 1445年誕生 年令	藕	(12)〜(26)の説 1444年誕生 年令	藕
1457	康正3・長禄1			14	
1458	長禄2	14	1	15	
1459	3	15	2	16	
1460	4・寛正1	16	3	17	1
1461	寛正2	17	4	18	2
1462	3	18	5	19	3
1463	4	19	6	20	4
1464	5	20	7	21	5
1465	6	21	8	22	6
1466	7・文正1	22	9	23	7
1467	文正2・応仁1			24	8
1468	応仁2			25	9
1469	3・文明1			26	10
1470	文明2			27	11
1471	3			28	12
1472	4			29	13

この異なる臈の数え方の違いをどう判断すれば良いのだろうか。そこで考えられることは、十四歳を出家の年、十七歳を授戒の年と捉えたい。その根拠は、資料⒂『宗要集要文』の書写奥書に泰蘂生年二十八歳、戒十二臈に基づくものである。「泰蘂生年二十八歳・戒十二臈」とは文字通りに、28歳の時には授戒して12年という年月をさしているのである。従って(3)〜(9)の資料に見られるところの臈の記述については、初めは出家の年から臈の数え方を出発され、後に十七歳の授戒から晩年に至るまで臈の記述を一本化されたと見れば矛盾がなく納得が得られるのではなかろうかと考えるのである。事実その年令の数え方は最晩年に至るまで典籍⒁〜㉖の基準にそって用いられているのである。

四、日朝・日意上人の比叡山同学説の疑義

従来の伝記において、後述するように宗門の伝承として日朝・日意上人の比叡山同学説を唱えることが久しく論ぜられている。ところが、その根拠たる資料を十分に検討しないままに、伝承として何ら矛盾を懐かず今日まで来てしまっているのが現状のように思われる。筆者は、その同学説に対し再検討すべき必要があると考え問題提起をするものである。そこで両師の比叡山修学の足跡を明らかにし、文献上から同学説の有無を検証して見たい。

日朝上人と日意上人との年令差は別表2に見られる如くに二二歳の開きが見える。日朝上人が最初に比叡山にて修学された可能性があるのは嘉吉年間（一四四一—四）である。[9] この時、日意上人は誕生前後なので同学説はあり得ない。次に日朝上人が確実に叡山修学をされたと見られる文献は真如院日住上人の『与中山浄院書』にある。寛正二年（一四六一）四月二十六日身延山久遠寺十世日延上人が遷化され、その後董継承者に身延山は日朝上人を選ばれた。この時、日朝上人は叡山で修学中の為、身延山の使者は叡山の日朝上人のもとへ迎えに行っている。それに応えて日

朝上人が下山する記述が『与中山浄院書』文書に見えるのである。[10] 日朝上人の叡山修学の時期は寛正二年四十歳の時であって、比企ケ谷妙本寺にて法華経講義をされた七月中旬以後のことである。[11] 日朝上人の身延晋山は寛正三年であるから、叡山滞在は実に短期間であったと言えよう。又、この時期に日意上人が叡山にいたという確認ができる資料は見当らないのである。

日意上人の叡山修学が見られる資料は、前掲(3)〜(9)の『宗要集私抄』十一巻の書写本である。寛正七年（一四六六）二月十六日から文正元年（一四六六）六月十八日で、泰藝が二二歳の時である。この時期の日朝上人は身延山に住し、また身延入山後の登叡の資料は見当らないのである。一方、日意上人関係典籍三百余巻を見ても叡山同学説を証明する資料はないのである。

では何故、従来の日意上人伝は叡山同学説を主張されたのであろうか。その根拠と伝承の時期を検証してみよう。その方法は日意上人伝の古い順に同学説の検討を推し進めることとする。現在、最古の日意上人伝資料と見られるものは慶長十五年（一六一〇）日意上人滅後九一年に書かれた寿量寺八世日祐上人の『勢州桑名妙延山寿量寺記』が挙げられる。[12]『日蓮宗宗学全書』第二十二巻（二二一—二二頁）に所収の寿量寺文書の「勢州桑名妙延山寿量寺縁起」は、元和二年（一六一六）六月に開山妙覚院日饒上人・開基檀越樋口内蔵助蓬庵によって創立された阿波徳島の妙覚山寿量寺所蔵の文書である。この文書には、桑名市寿量寺文書を写した際に原本と可成りの相違を生じさせているのである。[13] ただ、内容そのものには根本的な差は見られない。原本の寿量寺文書における両師の関係記述は、

雖レ然知二身延之日朝独当時明哲一而欲二相見一不レ堪二仰望一遥到二身延一謁二朝師一問難三日不レ止終抛二疑難一入二宗門一

とあって、叡山同学説を唱えていない点に注意を払いたい。寿量寺文書において日意上人が日朝上人をどのように

して知り得たのか、その経緯は不明である。当時の我が宗門の明哲は日朝上人の他に、廃林坊日隆上人・久遠成院日親上人・真如院日住上人がいた。日隆上人は日意上人が本宗に改衣する以前の寛正五年（一四六四）八一歳で遷化している。日親上人は長享二年（一四八八）八一歳まで生きるが、行動派なるが故にその生涯は波乱万丈にて日意上人との接点が見いだしにくい。日住上人は京都一致派教学の学匠である。関東に下向すること寛正三年・文明三年・文明六年の三度見える（北川前肇氏『日蓮宗事典』日住の項・六〇九頁）が殆んど京都に居住し、文明一八年（一四八六）八一歳で遷化す。日朝上人が在京の折、住師より学ぶ程にその名声は高い。その日住上人を尋ねないで日朝上人門下となったのは、何等かの縁あっての理由か。例えば、久遠寺日朝上人の門人と泰藝（日意上人）が、天台談義所で接触する機会があったとか。[14] しかし今は、その推測を裏付ける資料を見いだせない。

次に古い資料は、享保一六年（一七三一）に成立した日潮上人の『本化別頭仏祖統紀』である。両師に関する記述内容は次の如くである。

吾朝尊者少年之時掛搭叡山美誉普播。師謂是沙彌研習積年今也。超得幾閫悅惚之間見一僧告曰来吾語之来吾語之師曰仁其誰乎。僧曰吾是身延山主。師夢醒遐陬企歩漸届身延（中略）朝尊出見語不亘初見不言煖寒先挙一問法戦三昼夜。師豁然滌蕩故垢深入至微具識慈覚之謬錯更歩別頭芳區真理悟徹感涙無已。乃速棄酒業更衣更名削叡山籍結師資契（巻第十四・十四丁表・裏）

右の文によると日意上人は、ある時の夢に一僧を見る。年来の奥義を求めるために、その僧の名を問うて身延山日朝上人と知りて急いで身延山に登ったという内容である。日朝上人は少年の時、比叡山に登った事実は見当らない。この点からも『本化別頭仏祖統紀』における鎌倉・室町時代の記述に関する信憑性は、かなり低い価値という指摘は容認できるものである。[15] それでも、この江戸時代の時期の伝記上においてなお、日朝・日意上人の比叡山同学説は主

張されていないという事実を知ることができるのである。

次に古い資料として挙げられるのは明治三三年の安田貞教編『関西身延妙傳寺誌全』である。日意上人をして、「初天台宗の翅楚にして叡山の学頭たり」（五頁）という問題点があるものの、概ね『本化別頭仏祖統紀』説の紹介に過ぎないのである（前掲書一一六頁右）。

では、いつ頃から日朝・日意上人の比叡山同学説を唱えだされたかというと、最初に見える文献は大正十一年（一九二二）『日蓮宗宗学全書』第十五巻所収（二頁）の「日朝上人略傳」においてである。その内容を挙げると、次の通りである。

寛正三年更に日延上人の嘱を稟けて、身延山の法燈を継ぐ。上人時に四十一歳なり。

既にして上人の学誉道風は遠近に高く、求道の士四方より雲集す。叡山同学の舊知天台の僧勢州桑名妙蓮寺主来って師資の道契を結び、名を日意と改めしも蓋しこの頃なるが如し。[16]

右の如く、叡山同学の旧知と論じられているのであるが、その典拠は示されていない。「日朝上人略傳」の一年半後の大正十二年八月『身延山史』（八六頁）にも次の様に、かつて叡山同学の友と論ずるのであるが、残念乍らこれも、その根拠は示されていないのである。

当時身延朝上の学誉を伝え聞き、嘗て叡山同学の友なりしを頼り、延山に登りて朝師を訪ひ大に角論し、終に旧業を棄て衣を更め、朝師と師資の契を結ぶ。

以後、この叡山同学説は宗門において伝承であると称し、多くの学者等はそのまま論ぜられていくのである。その諸論文を示すと次の如くである。恩師室住一妙先生は『身延文庫略沿革』に

傳によると、師は叡山に遊学して朝上と同学、僚友ついに衣を更めて師資の禮を執る。[17]

執行海秀『日蓮宗教学史』昭和二七年に

日意はもと泰藝と称して、金鑽の榮源（棠海の資）の門にあったが、叡山では日朝と同学であったと傳へられ、その著に一帖抄見聞がある（八三頁）。

右の『一帖抄見聞』は元来、恵心流の七箇口伝法門であるから、著書であるということはありえないので、書写本とすべきであろう。

昭和三九年の立正大学日蓮教学研究所編『日蓮教団全史上』には、

日意は始め天台の人、伊勢桑名の妙蓮寺の主であったが、日朝とは叡山同学と伝え、その学徳を慕うて身延に至り改衣し寺を寿量寺と改めた。のち日朝の命をうけて上洛し文明七年（一四七五）一条尻切屋町に妙伝寺をたて……（同三〇九頁）

というように伝承として両師の比叡山同学説が論ぜられているのである。昭和四十年・五十年・六十年代に至ると、その伝承を前提として次のように論じていくのである。

田村完誓「身延文庫所蔵の中古天台口伝文献について」では、

日意はもと泰藝と称して、金鑽の榮源の門にあったが叡山では日朝と同学であったと伝えられている。[18]

昭和五六年の『日蓮宗事典』「日意」項の執筆者は、次の様な記述をされている。

日意はもと天台宗の学僧で、伊勢桑名の妙蓮寺の主であったが、日朝とは比叡山同学と伝えられ、その学徳を慕って身延に至り、日朝に従って改衣し……（五七三頁）

林　是晋氏は昭和六〇年に「身延山と関西身延妙伝寺」にて、

日意は円教院と号し、もと天台の学僧で、身延十一世日朝とは比叡山同学と伝えられ、伊勢桑名の妙蓮寺の主であった。……　日朝が身延の法灯を継承したのは寛正三年のことであるが、それ以前は比叡山をはじめ処々へ遊学している。その時期は明らかではないが、泰芸も寛正七年には横川で修学中であって、両者が比叡山で同学であった可能性は考えられる。寿量寺の所伝によれば、妙蓮寺が寿量寺と改められたのは文明元年のことであるという。事実であるならば泰芸が日朝の門に投じたのはこの頃ということになる。この前後泰芸は比叡山を出て若狭国そして武蔵国金鑽寺へと諸国を遊学している。その途次身延に日朝を訪ね教えを請う機会があるいはあったかも知れない……[19]

と論じているのである。以上、管見するところの叡山同学説を煩雑さを厭わず列挙して見たのであるが、林氏以外は凡て、考証の根拠をも示さず恰も古くからの伝承のように、叡山同学説を論じているのが現状なのである。これまで検証を重ねてきたように、その叡山同学説は古い伝承ではなく、突如として大正時代に初めて言いだされたものであって、しかも何ら資料的根拠に基づくものではなかったことを指摘して置きたい。従って、同時に再検討されるべき余地があることを提起するものである。林氏の推測の立脚点の一は『身延山史』等の叡山同学説の伝承を踏まえた上で、その補強を試みた推測の考証であるが前述の如く、同学説を裏付ける可能なる資料は現状では見いだせないのである。別表2の関係略年表に見るが如く、同学説については寧ろ困難さを覚えるのである。また第二の立脚点であるところの寿量寺文書の文明元年改衣説を前提にした視点についても、後述する理由から筆者は寿量寺文書そのもの文明元年の記述内容に疑念を懐くのである。

別表2　関係略年表

西暦　元号	行学院日朝上人	円教院日意上人
1422　応永29年	1月5日　伊豆宇佐美に生まれる	
1429　正長2年	4月28日　出家する　8才	
1440　永享12年	4月　武蔵国仙波談林に学ぶ　19才	
1441　永享13年　嘉吉元年 （改元2月17日）	4月　〃　〃　20才	
1442　嘉吉2年	8月2日　佐渡霊跡を巡拝する　21才	
1443　嘉吉3年	4月・8月　仙波談林に学ぶ　22才	
1444　嘉吉4年・文安元年 （改元2月5日）	5月10日　〃　〃　23才 ※嘉吉年間（20才～23才）に京都に遊学する	この年生まれる
1457　康正3年・長禄元年 （改元9月28日）	36才	天台宗にて出家して泰藝と名乗るか　14才
1460　長禄4年・寛正元年 （改元12月21日）	39才	天台宗の僧として受戒するか　17才
1461　寛正2年	2月24日　田島弘通所において法談する40才 4月26日　身延山10世観行院日延上人遷化 6月22日から7月中旬、比企ヶ谷妙本寺にて法華経を講談する この年、比叡山に遊学する 身延山より日朝上人を後継承すべく、使者が比叡山に迎えに行き、日朝上人下山する （真如日住『与中山浄光院書』）	18才

1462　寛正３年 1463　寛正４年	この年、身延山第十一世として晋山する41才 １月13日より『御書私見聞』第二十一巻「一代五時系図見聞」を述作する　42才	19才 20才
1464　寛正５年	43才	12月１日　台家『大綱深義抄』一巻を書写する　21才
1465　寛正６年	『三日講問答』の著作を開始する　44才	８月８日　天台論義の『問要』を書写する（58巻）　22才
1466　寛正７年・文正元年（改元２月28日）	身延山久遠寺にて『立正会問答』『三日講問答』述作　45才	２月16日～６月18日　天台論義の『宗要集私抄』11巻を比叡山横川の楞厳院都率谷、桂林房にて書写する　23才
1467　文正２年・応仁元年（改元５月５日）	身延山にて『立正会法則』作成　46才	８月27日　柏原談義所（近江国坂田郡柏原庄）第３代春海に恵心流教学の相伝を受ける　24才
1468　応仁２年	身延山にて『三日講』『立正会問答』述作　47才	７月25日　等海口伝の『宗大事口傳抄』を書写する　25才
1469　応仁３年・文明元年（改元４月28日）	身延山にて『三日講』『立正会問答』述作、講堂建立にて多忙　48才	武蔵国（埼玉県）金鑽談義所に学ぶ　26才
1470　文明２年	５月５日　門人に一流相伝法門口伝を伝授する 『三日講』『立正会問答』述作 二重塔建立を発願し募縁疏を作る　49才	６月７日　金鑽談義所の学頭房一乗院栄舜より七箇口伝法門の『初発真住抄』（初重）の相承を受ける　27才 ７月11日　若狭国（福井県）小浜普門寺堂にて学ぶ 10月14日、11月26日　武蔵国金鑽談義所に再び学び、学頭栄源より初重教学口伝法門を相承する
1471　文明３年	例講問答をこの年より開始する　50才 ８月１日『一代五時記』五巻なる『三日講』を述作	１月８日、２月９日、３月11日、『宗要集要文』を書写　28才 ７月17日、８月２日　摩訶止観大綱見聞を書写

		8月2日〜8月3日 武州金鑽談義所にて学頭栄源より恵心流七箇口伝法門の第二重を受ける 『第二重私聞書』『第二重中行私聞書』 『中行傳』『二秘聞書』 9月8日〜10月7日 雑々抄　書写（原本は33巻） 〃　23巻　〃 10月28日　栄源より俊範抄の教重、七箇口伝の法門『恵心流内證相承法門集』一帖を伝授し書写する
1472　文明4年	『三日講問答』述作　51才 『例講問答』述作	2月4日〜19日　恵心流七箇口伝の法門『一流相伝法門私見聞』を書写する　29才 4月11日　栄源より第三重血脈相承の観心を受けて『深秘見聞』を書写する （天台宗における第一流の学匠となる）
1473　文明5年	『三日講問答』述作　52才 『例講問答』述作	4月29日　久遠寺入門日意の名前で『懐中随身抄』第四下を書写する　30才 この年、天台宗の桑名妙蓮寺を寿量寺に改める 6月　叡山の僧徒大衆、急に寿量寺を襲い一山に放火し焼き尽くす
1474　文明6年	『例講問答』述作、二重塔の柱立　53才	動向不明　31才
1475　文明7年	『三日講問答』『本尊抄私見聞』述作　54才 西谷から久遠寺の移転大工事完了させる	9月19日　日朝上人の『問答用意抄』第3巻・5巻を書写する　32才
1476　文明8年	『観心本尊抄見聞』述作　55才	11月10日　『観心本尊抄見聞』第1巻を述作す　33才

五、日意上人の改衣の時期の問題

寿量寺文書によれば、日意上人の改衣は二六歳の文明元年という。前述の泰藝（日意上人）の出家・授戒の年令考で論じた(1)から(23)の書写本の識語を往見してほしい。日意上人が天台宗学僧時代に天台教学の奥義を極める為に方々の談義所を遍歴し、如何に努力を重ねて学んで来たか、その事実が確認できるのである。[20] また注（20）の内容から二六歳以降の足跡を検証すると、二七歳文明二年武州金鑽談義所学頭、一乗院の榮舜より『初発真住抄』初重（教重）の相承を受け、七月若狭国小浜普門寺に行き『十如是義』を書写し、十月再び金鑽談義所に戻り学頭権少僧都榮源より恵心流七箇口伝法門の初重『一流相傳法門』（一帖抄）を相伝する。二八歳文明三年榮源より第二重（行重）の『中行傳』『中行傳抄』『二秘聞書』『塔中口授』を相承し。二九歳文明四年四月十一日榮源より、ついに第三重『深秘胥聞』（證重唯授一人）の相承を受けて、念願であったところの天台宗一流の長者の仲間入りを果たすのである。[21] 当時の中古天台の多くの学僧達の談義所遍歴の目的は尾上寛仲氏が指摘されているように、一流の学匠となって比叡山において天台論義の堅者を勤めることを望まれる人が多かったと云う。[22] そこで、二六歳改衣説の前提に立つと泰藝は末寺十一ケ房を擁する台門の刹場である妙蓮寺住職の地位を捨て、日蓮宗の日朝上人のもとに弟子入りをして、なお且つ所化の立場で天台宗の奥義を極めるために談義所を遍歴したことになる。それでは台門の学頭が、唯授一人の観心主義の極意たる第三重の血脈口伝相承の法門という天台一宗の惣付嘱を果たして、他門徒の日意上人に相承させることが可能か否かというと、これは極めて困難なことであると言わざるを得ないのである。[23] 前述す書写奥書に泰藝の名は二十九歳まで見られた。よって寿量寺文書の「維時文明元己丑年也」という記述の二六歳改衣説を鵜呑みにできない。

この点から『日蓮宗事典』「日意」項の執筆者が文明元年説の「日意の改衣の年代については、更に検討の余地があろう」（五七四頁）と問題提起をされた意見に対して同意したい。さて、日意上人の改衣の推定の手掛かりを求めると、先の『日蓮宗事典』には「なお文明八年の写本には日意の銘が見える」と述べ、林是晉先生は「日意と名のる初見は文明七年のことである」と更に一年、早められている。文明八年の写本・文明七年の写本の孰れもが身延文庫所蔵の日意上人御筆の書写本である。

此の度、筆者は『本山妙傳寺資料鑑』の編集に携わり、身延文庫所蔵の日意上人典籍関係二百三十巻を拝見する機会に恵まれ『懐中随身抄』第四下の書写本を読むことができた。一丁表の内題には「手中抄」第四とあり、全体の分量は扉紙を入れて六十一丁である。比叡山東塔の無動寺谷圓海の法華経講義の所持本を書写したもので、内容は神力品下からの口決を述べ、神力・嘱累の付属、十四丁より観音面授の口決、三五丁から玄義・文句の口伝、四六丁から五種妙行の口伝、四教五時口決が書かれ、恵心流の杉生流深秘口伝（證聞の大事）が見える。六十丁書写奥書の識語には、

文明第五天癸巳四月廿九日巳時書了

久遠寺門人日意

と記載されている。現在、身延文庫には『懐中随身抄』四巻の下しか所蔵されていないが、この書写を終えた文明五年四月二九日の時は、既に日意と名乗っているのであるから、この時期には日朝上人の弟子となっていた事実を確認することができるのである。そこで、もう一度『勢州桑名妙延山寿量寺記』（桑名市寿量寺所蔵）文書の次の文を注目する必要がある。

於レ是叡山之僧徒大揉二怨嫉一、（文明）同五癸巳年六月急競来而欲レ拉二寺門一、寺坊楢越等屡拒屡戦、闘諍既両日、當此時圓教房日敬・真蔵房日登・華光房日能・戒行房日玄・大泉房日順・蓮行房日清・三位日重・兵部卿日盛・樋口蓮信（法名日蓮）・青柳新四郎（甲州之産土）等戦死、樋口氏之士勵レ勇追二山僧一、山僧放レ火去、一山悉為二焦土

と記述されている。この叡山僧徒の急な六月襲撃事件は日意上人の改衣の問題と脈絡的に関連していると見ることが妥当である。そういう視点から、この事件は文明五年四月二九日頃に日意上人が天台宗を改め、身延山日朝上人の弟子となったことに対する叡山僧徒の報復行為そのものであったという説[24]には、筆者も首肯けられるのである。

日意上人の改衣の理由については、寿量寺文書に「問難三日不レ止終抛二疑難一入二宗門一」、『本化別頭仏祖統紀』には「至二慈覚大師理同事勝之説一疑滞不レ少決レ之無レ人而過……法戦三昼夜師豁然 滌二蕩故垢一深入二至微一具識二慈覚之謬錯一」という、これらの内容は、天台教学上の疑問を解決するためと見たのであろう。『日蓮教団全史上』（三〇九頁）と『日蓮宗事典』（七三頁）では「日朝とは叡山同学と伝え、その学徳を慕うて身延に至り」日朝上人に従って改宗したと述べ理由が見られないが、筆者は、妙傳寺所蔵日意上人書写本の『止観法華大意』の書写奥書の識語にいうところの「私云常学者天台宗習慣、法門之任二得意一處、謗法罪障間二改レ之一」という文に関心を寄せるのである。日朝上人の弟子となった理由の一つには謗法罪障を改めるということもあったと推量するものである。

六、むすび

従来の円教院日意上人伝研究に関する諸論文においては、日意上人の誕生・出家・授戒の年令考等の考察は未だ試みられていない。日意上人の誕生を知る手懸かりは、日意上人御筆の書写奥書の識語から逆算することが出来るので

あるが、然しそれにも二説見られた。日意上人自身が後年に『止観法華大意』一巻（一四丁）書写奥書の識語に示した「於京都一条弘通所妙傳寺生年五十四書了　明應六年丁巳五月廿七日巳剋斗書之日意在御判」の五四歳が別表1の一四四四年説を述べる二七歳『一流相傳法門私見聞』書写奥書の識語とそれ以降の識語とも合致する。従って、晩年に至るまで一貫された生年令から逆算して、その誕生は一四四四年と判断して間違いない。一方、薦の数え方にも二説見られたが、これは出家時と授戒時からの数え方と見ることにより、この問題の解決はできるであろう。

叡山同学説の問題は既に検証した如く、また別表2に見られる通り両師の同学を裏付ける足跡は見当らない。同学説は突如として大正十一年に言いだされ、然もその根拠は不明のままに今日においても、伝承と論じられていることの問題指摘を試みることができたのである。同時に日意上人の改衣の時期も、『懐中随身抄』に基づくと従来の説よりも早い文明五年四月二九日以前と論証することができえたのである。これらのことから考えると日意上人伝の本格的な研究は寧ろ、これからであろうと実感している。更に、今後は三百点余の典籍の解読が進むにつれ、より一層円教院日意上人の顕彰が可能となり、その存在の重要さが認識されていくものと覚えるのである。

【キーワード】

円教院日意・行学院日朝・身延文庫・意師目録・日意上人著述目録

註

（1）身延山久遠寺編『身延山史』六三―八七頁。影山堯雄『日蓮教団史概説』四五―六頁。立正大学日蓮教学研究所編『日蓮教団全史上』三一〇頁。

(2) 桑名市寿量寺所蔵『勢州桑名山妙延山寿量寺記』に円教院日意上人は天台宗の刹場妙蓮寺の貫首と記述されている。この寿量寺縁起には泰藝の名前は記載されていないが、身延山久遠寺「身延文庫」所蔵の日意上人書写本には泰藝という名前が数十見える。嘗て泰藝の名は久遠寺門人日意と改名されている書写本が存在す。現存する泰藝・日意上人の著述本・書写本には『本化別頭仏祖統紀』三〇一頁に言うところの法鏡の字を現時点では確認することはできない。『身延山』八六頁にも日意上人の字を法鏡というが、その典拠を見ることは出来ないのである。

(3) 前掲『勢州桑名妙延山寿量寺記』。『本化別頭仏祖統紀』三〇一頁。

(4) 拙稿「開山円教院日意上人伝」(桑名貫正・望月真澄共編『本山妙傳寺資料鑑』所収一四九頁に於て妙傳寺の開創を『身延山史』(八六―七頁)の説に従い文明九年と述べた。その後、再考を重ねたところ、『日蓮教団全史上』(三〇九頁)の文明七年説が妥当と考え、文明七年に訂正したい。

(5) 日意上人の『蔵書目録』の「高祖御筆御書註文」は、立正大学日蓮教学研究所編『昭和定本日蓮聖人遺文』第三巻に、『大聖人御筆目録』(身延意師目録・二七四二―五頁)として所収されている。「台教聖教注文日意所持本」は、前掲書『本山妙傳寺資料鑑』一八〇頁―三頁に掲載したので参照してほしい。

(6) 影山堯雄編『新編日蓮宗年表』一三九頁。

(7) 拙稿「開山円教院日意上人伝」(前掲『本山妙傳寺資料鑑』所収)一二四―五頁。

(8) 拙稿「開山円教院日意上人著述目録」(前掲『本山妙傳寺資料鑑』所収)一七五―八八頁。

(9) 『日蓮宗宗学全書』第十六巻に「日朝在京之時嘉吉年中マデハ醍醐ノ炎魔堂ノ壁ニ此書有リ之云云」(七四頁)の文が見えることから可能性が考えられる。然し比叡山に行ったかどうかは不明で、その可能性は推測の域を出ない。

(10) 日住『与中山浄光院書』(『日蓮宗宗学全書』第十八巻所収・八一頁)往見。

(11) 室住一妙恩師『行学院日朝上人』四三頁。日延上人遷化の時期については寛正二年説(『新編日蓮宗年表』二一九頁)と寛正三年説(『日蓮教団全史上』三〇七頁)がある。この相違は、日朝上人の身延晋山の寛正二年説(『身延山史』六三頁)と寛正三年説(『日蓮教団全史上』三〇八頁)の問題と絡んでいる。孰れにしても寛正二、三年頃における両師の比叡山同学説を裏付ける資料はないのである。

(12) 本論文の引用の桑名市寿量寺所蔵「勢州桑名妙延山寿量寺記」は身延山大学図書館所蔵の日蓮宗宗宝調査資料による。

（13）原本の桑名寿量寺文書と阿波徳島寿量寺文書を対照すると、原本を書写する際に生じた相違が阿波の方には次の如く見られる。字の違いが二十一字、削除が八字。挿入が十八字、文章上の文脈の移動箇所の相違が四ケ所見える。

（14）尾上寛中「関東の天台宗談義所（中）」（『金澤文庫研究』第十六巻四号所収）一四―五頁に身延山から仙波談義所に智蔵房・河内公の遊学が見える。日意上人が天台宗一流の長者となって、改衣するまで余りにも短期間なことを考えると恐らくは日朝上人門下の誰れかと日意上人と接触があり、天台教学に大きな疑念をもたらす契機が生じたのではないかと推測するのであるが、その資料を見出すことはできない。

（15）冠　賢一『本化別頭仏祖統紀』の解説（雄山閣『日本仏教典籍事典』所収・四八九頁）を往見されたい。

（16）同書は『日蓮宗宗学全書』第一巻所収の「刊行会誌」（五頁）によると宮田海音・稲田海楽・浅井要麟・影山堯雄編輯で大正十一年二月十六日に発行されている。

（17）恩師室住一妙先生『身延文庫略沿革』一八頁、昭和十八年八月。

（18）田村完誓「身延文庫所蔵の中古天台口伝文献について」（『中村元博士還暦記念論集インド思想と仏教』所収・六五〇頁）昭和48年。

（19）林　是晋「身延山と関西身延妙伝寺」（渡辺宝陽編『法華仏教の仏陀論と衆生論』所収）五五四―五頁。

（20）泰藝の談義所遍歴の詳細は拙稿「開山円教院日意上人伝」（前掲書一三二―四六頁）を参照されたい。

（21）第三重の口伝相承者については『恵心流教重相承私鈔』において「仍此三重血脈帯（アスルヲナ）以一流長者（トスル）也」と記述されている（上杉文秀『日本天台史統』所収・八一五頁）。

（22）尾上寛仲「中古天台に於ける談義所」（『印度学仏教学研究』第八巻第一号・二五七頁）。『叡山学報』復刊第一号二六頁。

（23）大久保良順「恵檀流兼学（雑伝）の様相」（塩入良道先生追悼論文集刊行会編『塩入良道先生追悼論文集　天台思想と東アジア文化の研究』所収）三〇七―三一三頁。にて「夢々他見をなすべからず」等と見られる識語は、一つの筆写の形式と見られると指摘がされている。そう考えると唯授一人もそうなのかと推定されるが、しかし桑名寿量寺への叡山僧徒の文明五年六月襲撃事件の一件は、後述するが如く日意改衣に対する報復行為であったから、日意の文明元年二六歳改衣説は早やすぎる嫌いがあるのである。

（24）『日蓮教団全史上』三〇六頁。